

## 〔書評〕

木部暢子著

## 『西南部九州二型アクセントの研究』

上野善道

## 0. はじめに

ここ数年の木部暢子氏の活躍ぶりは、鹿児島県という方言研究にとって恰好の地に職を得て、水を得た魚のごとき感がある。その木部氏が九州大学に提出して受理された博士学位論文が本書となって刊行された。鹿児島大学着任以来11年間の既発表論文に手を加え、いくつか書き下ろしの論文を追加してある。

全体の構成は4部からなる。二型アクセントの基本的性質を考察した第1章、漂流民ゴンザの資料分析から18世紀の薩摩アクセントを復元した第2章、九州の二型アクセントの成立過程を扱った第3章、そしてトカラ列島の方言全般を対象とした第4章である。本書の「はじめに」では、各章の要点が要領よくまとめられている、良い導入となっている。音調記号には〔上げ〕と〔下げ〕を用いており、本書評もそれに倣う。

## 1. 第1章「西南部九州二型アクセントの姿」

本章では、鹿児島市方言を中心に、一部他方言も交えながら、アクセント法則（第1節）、二型アクセントの弁別特徴（第2節）、付属語のアクセント（第3・4節）、アクセントとモーラ・シラブルの関係（第5節）、文末詞の音調（第6節）を扱っている。

以下、本書の鹿児島市方言データの比較検討にあたり、同市に隣接する日置郡吹上町出身の久富木成大氏（1941年生）から得た私の資料を用いる。鹿児島市方言資料は学生から聞いたものしか手元にないための措置である。両方言は極めて近い関係にあるが（p.50）、方言差・個人差があることを想定して所属語彙の違いや語音の相違などは問題とせず、アクセント上で重要と判断した点に限定して言及する。

1.1 第1節の「鹿児島市方言のアクセント法則」は、比較的よく知られている複合名詞などに加えて、地名、人名、象徴詞、疊語、コソアド、接頭語（「はじめに」では接頭辞）までカバーして分かりやすく説き、この分野の恰好の手引きとなっている。

1.1.1 要望として、拙論（1992）で扱った2つのテーマ、すなわち数詞と単独では（ほとんど）使わない漢字形態素を1字目にもつ2字漢語の問題もさらに発展させてほしい。特に後者における字音声調との関連は、去声の問題——鹿児島方言はこれが上声

に合流する前に分かれた——も含めた全体的な解明を字音語にも明るい木部氏が期待したい。

また、「～と」型の象徴詞は、吹上り方言で

(音が)[トン]ト～[ト]ント (ただし、ご無沙汰は[トン]トのみ)、

ゴ(ッ)[トン]ト～ゴ(ッ)[ト]ント、ポ(ッ)[ツン]ト～ポ(ッ)[ツ]ント

の併用が見られる。これらの(-)[○]ントは通常の音節構造との関係を破っており、象徴詞ゆえの型と考えるが、鹿児島市方言にもこれらの型がないか、興味がある。

1.1.2 p.1 最終行1拍語の○は $\bar{O}$ 。p.3とp.5に3例ある「撥音・長音」は「撥音・促音」。p.10の表「漬ける」の[ツ]-ッは[ツ]クツ、「着る、漬ける」の禁止形は語末のッを削除。

1.2 第2節「鹿児島市二型アクセントの音声特徴と弁別特徴」は、文節結合の音調を調べ、A型は末尾から2音節目が上昇し末尾が下降すること、B型は末尾が上昇することがそれぞれの弁別特徴であると結論づける。第2文節以降でもA型の「上昇と下降」、B型の「上昇」がそれぞれ消えることがないというのが論拠である。

1.2.1 これは吹上り方言や鹿児島市の若年層での私の観察とも一致し、賛成する。ただし問題は、本書の記述にこれと合わない例がたくさんあることである。

たとえば、第1節に戻るが、そのコソアドの箇所 p.16 では

[コ]ノミチ, [コ]ンミツ (この道); [コ]ノハナ, [コ]ンハナ (この花)

とあり、「道」も「花」も同じ音調になると読めるが、吹上りでは決して同じにならず、

[コ]ノ[ミ]チ, [コ]ン[ミ]ツ; [コ]ノハ[ナ], [コ]ンハ[ナ]

である([ミ]ツはミが半長になりその中で下降調を取る)。p.11の形容詞打ち消し形

[ア]コ#ナカ (赤くない), [ン]モ#ナカ (旨); [ヨー]#ナカ (良), ハ[ヨ]#ナカ (早)

も、吹上り方言では、それぞれ

[ア]コ#ナ[カ], [ンー]モ#ナ[カ]; [ユ]#ナ[カ], ハ[ユ]#ナ[カ]

である(#は、「アクセント句」——私の言う「アクセント単位」——を示すものとして木部氏が用いているもの。以下、#か空白か連続かはすべてそのまま従う)。

1音節B型は後続部分に来ると上昇が現われないこともある(p.33)として、

ナベ[ガ] アッ (鍋がある); [ミ]ズ ノン (水を飲む)

などの例をあげているが、吹上りでは、自立語の場合はB型も必ず上昇を伴い

ナベ[ガ] [アッ]; [ミ]ズ [ノン]

である(ナベ[ガ] [アッ]は2段階上昇する意ではなく、ガとアッはともに高く、かつスタック一時的に発音されることを表わす)。p.11の活用形 [ア]コ#ナッ (赤くなる) 等も同様に [ア]コ#[ナッ]等である。確かに、前に下降があると後の上昇の度合いは弱まるが、上昇そのものは吹上り方言では明らかに存在する。

1.2.2 もう一つ事実確認をしたい点がある。それは促音を含む音節における下降調の有無である。下記の例はその一部である。双方の記録がともに事実だとすると、未報告の方言差となる。慎重に確認をお願いしたい。

鹿児島（本部）

吹上（上野）

A ド[ケ [イッ]ト カ（どこに行くのか） ド[ケ [イ]ット [カ（p. 28）

B ド[ケ [アッ]ト カ（どこにあるのか） ド[ケ [ア]ット [カ

A [キッ]チョ[ラン]デ（着ていないから） [キ]ツチョ[ラン]デ（p. 44）

B

cf. [キッ]チョ[ラン]デ（切っていないから）

A [キッ]ド～[キッ][ド]（着るよ） [キ]ッ[ド （p. 46）

B [クッ]ド～[クッ][ド]（来るよ） [ク]ッ[ド

1.2.3 p. 21 「登りアクセント核」は「のぼりアクセント核」（2例）。p. 22 に引く和田説の B 型に `○, `○○, …のように `を付けてあるのは、いずれもトル。

1.3 第 3 節「鹿児島方言の助詞・助動詞のアクセント」と第 4 節「長崎県加津佐方言の助詞・助動詞のアクセント」は、表題通りの分析をしたもの。「従属式、独立式、特殊式」に三分し、独立式の中をさらに A 型、B 型、および終助詞の類いでイントネーションが被さって固有の型を決めたい X 型に三分している。

1.3.1 この分析は有坂秀世の顕在型/潜在型の区別に基づくところがあるが、有坂と立場を異にする私も木部氏と事実上同じ分析をしている（1984；1992）。その意味で、この分析がどこまで「潜在型」と関わるのか疑問がある。あるいは、私は（助動詞一般はもとより）一般助詞の類いをそもそも「自らのアクセントをもたない」と見るのに対して、木部氏は「従属する性質の潜在アクセントをもつ」と認める点が違うのかとも考えたが、「自身がアクセントを持たず」（p. 40）という表現もあり、よく分からない。

個別の型では、準体助詞のトは A 型、並列助詞のシは B 型としてあるが、氏のデータを見る限り、[オイ]ガト（私の）、オ[キッ]シ（起きるし）でともに低い。トは [ユ]タ[ト]ガ（言ったのが）ともなるので A 型、シは「後ろに他の助詞が続いても、音調の山が現れない」（p. 45）ことから B 型と分かるというが、シの後に付く例が思い付かないので、具体例を知りたい。吹上では、[オイ]ガ[ト]-（、[オイ]ガ[ト]ガ）と下降調をとるので A 型であり、オ[キッ]シのシはトと違って下降調を取らないことで B 型と認定できる。そこから鹿児島市もそうだろうと予想はするが、他での調査のためにも確例が欲しい。

1.3.2 第 4 節は長崎タイプの方言でこのテーマを詳しく扱ったおそらく最初の論考で、非常に興味深い。ただ、その解釈と事実認定には、なお考えたいところが残る。

独立式の助詞・助動詞では、前接する単語が A 型であれば前接語の型がそのまま生かされて助詞・助動詞は低く接続するが、前接する単語が B 型であれば助詞・

助動詞の持っている型 [A 型/B 型] が現れる。(p. 56)

これは、B 型に付く例をもとに、A 型に付く場合も助詞・助動詞は「潜在的に」独立式の型をもつと判断しているとみられる。しかしながら、下記の例を見ると、[カ]ーに対して [カー]-などで、A 型自立語の音調型が「そのまま生かされて」いるとは言えない。

自立語                                      +A 型付属語                                      +B 型付属語

A [カ]ー(蚊), [ウ]タ(歌) [カー]ジャロ, [ウタ]ジャロ:[カー]バイ, [ウタ]バイ

B テー[-(手), ア[メ(雨) テー-[ジャ]ロ, アメ[ジャ]ロ;テ[-]バイ, ア[メ]バイ  
むしろ、付属語が付いた全体で最初の 2 モーラだけが低い A 型のパターン、氏の用語では従属式になっていると見るべきではないか。(これは韓国語慶尚道方言によく見られるパターンと酷似していて興味が引かれる。)

もっとも、[ウタ]ジャロ, [カー]ジャツタのように、A 型自立語に続く A 型付属語に実は 2 度目の下降が出る可能性も考えられる。前者のように下降が連続して起こる場合は聞き取りが難しいかもしれない(実際に対立がないことも考えられる)が、後者のように 2 度の下降の間に 1 拍あれば聞き分けは楽になる。詳しい観察を望みたい。

木部氏は、この(事実確認が望まれる)自立語+独立式付属語の音調に基づいて A 型/B 型の弁別特徴を考察しているが、それよりもまず、氏自身が鹿児島市方言で行なったように、文節同士が結合した時の音調で調べるべきであろう。

1.3.3 最後に著者は鹿児島方言と加津佐方言の助詞・助動詞の比較をする。過去のジャツタ(・ヤツタ)が鹿児島では B 型だが加津佐では A 型であるなど、両方言の異同が一覧できて便利だが、比較の視点が定まっていないために、表の意義が薄れている。「形」を離れて「意味」だけの分類をしているからである。その結果、動詞接続「順接」の欄で鹿児島はデ、セエ、加津佐はケンを較べ、片や従属式で片や B 型としている。名詞接続のカとノ・ンなども同様である。アクセントの比較には「同源語」が前提になる。それを離れると、意味・文法範疇によって取りやすいアクセントの一般的傾向を調べることになってしまう。仮に後者が目的なら、本文から一貫してその視点で分析しなければおかし。

1.3.4 p. 44 と p. 49 の穎娃町は穎娃町(穎-もあり?)。p. 45 の「磨けば」「腐れば」は「磨いている」「腐っている」。p. 54 「アクセントを持つもの(従属式)」は「…(独立式)」。

1.4 鹿児島方言は同じくシラビーム方言とされる奥羽方言と違って寸詰まり感がなく、鹿児島県内諸方言でも地域差があって周辺ほどモーラ的で入声化などの音変化も少ないことから、以前の鹿児島方言はモーラ方言であったと論じているのが第 5 節「鹿児島方言はシラビーム方言か」である。著者は「数える単位」と「担う単位」を区別する

立場に立つ(甌島方言)が、その a 型の、しかも主頂点の担い手に限ってシラブル単位と認定することの意味付けがあれば、なお良かった。

1.4.1 拙論(1992)では、ハネムーンやトロンボーンなど「\$ ーン」という特殊な構造を含む外来語につき、吹上町のアクセント報告を行なった。木部氏は鹿児島市方言の調査でこれを基本的に支持しながら、一部に食い違いがあって「このあたり、年齢による差や地域による差、あるいは個人差があるかと思われる」(p.75)と述べている。

私の立場からこれを敷衍して述べると次のようになる：これらの方言はシラビームアクセント方言で「システム」としては同一であるが、特殊な構造の単語に接した時にその音節単位というシステムをどう「適用」するか、すなわち具体的にどのように音節を切るか、に関して差が出てくる。適用の違いは同一個人内でも起こりうる。

1.4.2 鹿児島市方言の「無声化音」を取り上げ、「注意すべきは、末尾の音が無声化した場合、そこが低く聞こえることである」(p.76)と言う。その結果、「橋」(A)と「箸」(B)がともに[ハ]シ.と聞こえることがあり(助詞付きは区別)、語句の途中でも[ムシ.]メ~[ム]シ.メ(娘)のように無声化した音は低く聞こえることがあるとする。

吹上方言ではこれは起こらない。[ha]・ç(橋), [haç](箸), [muç]me(娘)で安定している。CVの無声化と言うよりも完全に子音だけであり、全体でCVC構造となっている。

対象方言の違いかもしれないが、氏の場合、「無声化」という名前とそれに対する固定観念が事実観察を歪めているおそれがある。枕崎方言の先行研究に[ムス.]メ, [ムス].コとあるのを受けて、「これは、この方言がシラビーム方言だという解釈に立ってのことだと思う。しかし、無声化した音は低く発音されるのが普通である。従って、実際には[ム]ス.メ, [ム]ス.コだったのではないか」(p.335, 一部略)と述べているからである。

有声音でないと高いピッチを担いにくいことは確かであるが、無声(化)音は必ず低いと決めつけるのではなく、独自に高さを調節しにくいと見たい。特に「1音節のCVC」の場合、高平のCVの後の-Cは同じ高さで実現するのが普通で、むしろこれだけを低くする方が困難である。低く発音したつもりでも、その意図通りには聞き取ってもらいにくい。はっきり低い-Cを出すためには、CV-の母音の中で下降調を取る方が楽である。(標準語では促音(Q)がこの-Cに該当するので、慣れない人は「マッチ」などを発音・観察してみると良い。ただし、マ.ッ.チと3音節に切り、しかも“音韻論的なアクセントの型”として高低低型を意識した発音は不可。私の言うモーラアクセント方言においても、ほとんどの方言で[CVQ]と[CV]Qの対立はない。)

1.4.3 上甌島江石方言でイナ<sup>ビ</sup>カ<sup>リ</sup>に対してイロ<sup>エ</sup>ンピ<sup>ツ</sup>であることに基づき、本来の「高」の2つ前に置かれていた\*イロ<sup>エ</sup>ンピ<sup>ツ</sup>の副頂点が主頂点に変わった時に、ンがアクセントを担わないシラブル単位に変化した、と木部氏は主張する(pp.81-82)。

しかしこの例は、「本来の高の2つ前」ではなく「語頭から3モーラ目」に副頂点を置くシステムである可能性がある。その本来の「高」をもつとされる甌島主流方言の例を見ると、一層そう思われる。その甌島主流方言は、主頂点は鹿児島市方言と同じで、それに加えて副頂点が次の規則で決まると言う。

原則として主頂点の2つ前。しかし主頂点より前に4つ以上音があるときには、最初から数えて2つ目。(p. 78)

しかし、「前に4つ以上」という条件は不自然で、私なら次のように見る。

副頂点の位置は原則として語頭から数えて2モーラ目。ただし、主頂点の前に1モーラは「低」を含まなければならない。

江石方言の形は、この2モーラ目の副頂点が可能な限り——移行しても「高」が連続しないだけの余裕がある限り——3モーラ目に移り、その後で主副が反転して出来たと考えられる。すなわち、\*イロエンピツ>\*イロエンピツ>イロエンピツの変化で、ンは最初から関係せず、イロエンピツの形をもって音節単位の論拠とはできなくなる。

1.4.4 p. 71で東京方言のカ[イモノなどを不可([カイモノのみ可)とするのは言い過ぎ。p. 73の[クッ、クッ[ガは「口(が)」でなく「靴(が)」。p. 79のケーター(キヤーター)、アイブ、アユード、ウラム、ウローダはケーター(キヤーター)、アイブ、アユード、ウラム、ウローダ。p. 80のアルマは存疑。ツクエはツク。エか? p. 81のニギリメシはニギリメシ。

1.5 第6節「鹿児島方言文末詞の音調」はイントネーション論である。この分野、とりわけ文末詞との関係は、方言はもとより、標準語でさえ分析方法・表記法ともに開拓の余地が多く残されている。今後、試行錯誤を経て発展させていくべきテーマである。

## 2. 第2章「18世紀薩摩の漂流民ゴンザのアクセント」

1728年にロシアに漂流した少年ゴンザの薩摩方言資料は村山七郎『漂流民の言語』(吉川弘文館, 1965)の翻刻でつとに有名になり、以来、特にそのアクセントをめぐる数多くの論文が発表されてきた。その解釈はさまざまで、表記の信頼性を疑うものまであった。しかし、その後、村山氏が依拠したアッシュ本の原本に当たるロシア科学アカデミー本のマイクロフィルムが鹿児島県立図書館に収められ、研究が大きな進展を見せることになる。アッシュ本ではアクセント符号がかなり落ちているのに対して、アカデミー本ではほぼすべての文節に付いているからである。この新資料を活用して画期的な仕事を成し遂げたのが、木部氏のこの第2章である。

章の構成は、第1節でゴンザの著作の経緯を述べ、次いで順に各節で、名詞・助詞・動詞・形容詞のアクセントを扱い、最後の第6節でこの時代はまだ長母音が保たれてい

たという解釈を述べている。本書の中で一番長い章で、全体で167頁に及ぶ。第2節以降では、用例が詳細に挙げられている。「本資料が必ずしも一般には目にしやすい資料ではないことに配慮して、できるだけすべての用例を載せることにしたからである」(はじめに, p.5)。ちなみに、伝え聞くとところによると、このマイクロフィルムは閲覧のみで、複写は不許可だという。評者もそれを入手しないままこの書評を書いている。

2.1 さて、木部氏の分析のポイントは、語頭にある CVC, CCV などの長音節〔重音節〕(文字連続)にアクセント符号が付いていることが非常に多いという事実気づいたことにある。これを慎重に取り分けた結果、名詞・動詞・形容詞ともに、

$\alpha$  型 =  $\acute{O}O$   $O\acute{O}O$   $O\acute{O}OO$  = 現代鹿児島方言の A 型に対応

$\beta$  型 =  $O\acute{O}$   $OO\acute{O}$   $OOOO\acute{O}$  = 現代鹿児島方言の B 型に対応

という体系が姿を現わし、結論として、18世紀初頭の薩摩アクセントは現代の長崎式に近い二型アクセントであったことが判明した。これは先行研究と一線を画す成果である。(〔ста〕кан《コップ》, [хоро]и́ю《良い》など、ロシア語平叙文の単語単独すなわち文末位置の発音では、「力点」=アクセントのある音節が低く、その前に音節があればそれは高くなるという現象が知られているが、これは関係していないらしい。)

もっとも、助詞のガが従属式なのにヲは独立式という、現代諸方言では類を見ない現象など新たな謎も出てきたが、これらは今後の楽しい研究テーマである。

2.2 著者が採用した用例の提示形式に一つ要望がある。氏は、まず原典のアクセント表記ごとに大別し、その中を現代鹿児島方言の A 型と B 型に分け、中をさらに長音節/短音節の音節構造で分類する。各見出し語には、意味(ロシア語の訳)、金田一の類、現代鹿児島アクセント、出典章番号を付す。

しかし、見出し語の後にいきなり「意味」を出すのではなく、まず「対応形」を示してほしかった。p.155 l.12 の例で言えば、čodzďare (水盤 <A>, …) ではなく、čodzďare (手水盥《水盤》<A>, …) のような形である(記号の形はこだわらない)。なぜなら、1.3.3 節に述べたことと重なるが、現代鹿児島方言アクセントとの関係を見るためには、対応形でないが無意味だからである。もちろん、氏がこれを理解していないということではない。p.154 l.-11 の ináka (農村 <1 類>A, …) を見ても、「農村」ではなく「田舎」という語形のアクセントをきちんと問題にしているし、何よりも第1節での先行研究への批判からもそのことは明らかである。

にもかかわらずこのことをあえて指摘するのは、対応形の表示を省略したために生じた不統一と覚しき例が見つかるからである。たとえば、

p.155 l.13 kosánnin•(捕虜 <A>, 露日 24) (p.276 l.9 も同じ)

p.190 l.7 kosánnin•(降参人 <B>, 露日 24)

を見ると、同一項目と判断されるにもかかわらず、片や「捕虜」という「意味」が、片や「降参人」という「対応形」が書かれており、かつ、現代鹿児島アクセントが異なっているのである。平山輝男編『全国アクセント辞典』（東京堂、1964）によれば「捕虜」はA型、「降参」はB型で、「意味」を示す単語のアクセントを書いたものではないかと疑われる。最初からこれを「kosánnin・(降参人《捕虜》…)」としてあれば、自ずと違った結果が得られたであろう。

この他にも、評者にとって対応形が不明だったり、確信がなかったりするものがある。それが分かっても、果たして現代鹿児島方言でその対応する形を確かに使っているのか、そこに載っているアクセントが他ならぬその語形のものなのか、確認をしたくなる項目も散見される（上記「手水盥」の「手水」も平山辞典ではB型とある）。そもそも「対応形」は、その資料を扱う人がその項目をどう読み取ったかの「解釈」を反映するものである。アクセントを扱う以上、著者が自らの責任において逐一それを明示すべきものとする（「意味」が同時に「対応形」を兼ねる場合を除く）。そうしてこそ、読者はそれを真に批判的に読むことができる。

ゴンザ資料の研究が完成段階を迎えた時には、「意味上の相当形」と「語形の対応形」を峻別した上で、それらを含む各種の索引付きの資料を公にしてほしい。それにより、アクセント以外の変化を探る目的にも活用できるようになると期待される。

2.3 ゴンザアクセントから離れるが、本節の現代鹿児島方言の記述に mon[tsu? (紋付き, p. 150), mi[ka]zu? (三日月, p. 153) が出ている。木部氏は本書以外の論文でも「語末のつまる音」は音声記号では声門閉鎖音で書いている。氏に限らず、私が目にするほとんどの論文がそうである。しかしながら、吹上方言では-tであって声門閉鎖音ではない。録音で聞く鹿児島市方言も、私には-tに聞こえる。吹上方言で声門閉鎖音で実現するのは、ki?[ne (狐, p. 150), [su?]ma (隙) など「鼻音の前のつまる音」である（-tも可）。

p. 121の(4)の年代1936などはすべて1736など。p. 123の「意味普通」は「意味不通」。p. 136「お漬け」は「お付け」。p. 183の $\alpha$ 型動詞、 $\beta$ 型動詞は、 $\alpha$ 型名詞、 $\beta$ 型名詞。

### 3. 第3章「西南部九州二型アクセントの成立」

屋久島アクセントが西南部九州アクセントの古態を示すもので、ゴンザ式 $\rightleftharpoons$ 長崎式 $\rightleftharpoons$ 屋久島式 $\rightarrow$ 鹿児島式の変化であると結論づけた第1節、二型か曖昧かで認定が分かっていた種子島アクセントについて二型の話者の報告をした第2節、枕崎アクセントの成立過程を追った第3節、全体のまとめである第4節から成る。



3.1 最初の3節に関しては、一言ずつ触れるにとどめる。

第1節「屋久島式アクセントは古いか新しいか」の結論は大筋として支持する。私も10年ほど前に島内各集落の調査を終えており、詳しい私見はその資料とともに公にすることにしたい。

第2節「種子島のアクセント」。種子島のように二型/曖昧の混在している地域においては、記述の順序として対立のある方が優先される。氏の報告はその意味で貴重である。二型>曖昧の過程を追うことによって見えてくることが多々あるからである。なお、中種子町に関しては、本論文の話者でもある植村雄太郎氏の編になる『種子島方言辞典』（武蔵野書院、2001）に木部氏の詳しい記述「中種子方言のアクセント」（pp.25-36）があり、また、CD化された植村氏自身の発音を聞いて確かめることができる。

第3節「鹿児島式アクセントから枕崎式アクセントへ」の枕崎方言は、私も以前から調査を進めているところである。ただ、枕崎旧市内は同じ話者を相手にしているが、残念ながら、氏は「高中」の音調が聞き取れていない。

3.2 第4節「西南部九州二型アクセントの成立過程」は、豊前式のような「核」の体系を経たという通説を否定し、名義抄式の高起式/低起式という「式」の別をそのまま受け継いでA型/B型になったという主張を展開する。そして、A型/B型の弁別特徴は、最初は「高く始まる/低く始まる」であったとする。全体として「式」と「核」が考察の中心をなし、その考えは早田輝洋氏の語声調論に負うところが大きいとある。

しかしながら、木部氏の目にとまらなかったようであるが、実はすでに私は次の考えを拙論（1988：64）で出している。豊前式などを経ずに、名義抄以前の体系から直接に導き出す案である。具体的には、HHM-の「下降式」をもつ体系からHHL-に変わってA型が出来たとするものである。記号を統一して引用する。「!」は中下降を示す。

アクセント祖体系      二型アA型の祖形

\*[○○!○○○ > \*[○○]○○○

\*[○○!○○]○ > \*[○○]○○○

\*[○○!○]○○ > \*[○○]○○○

\*[○○]○○○ = \*[○○]○○○

\*[○]○○○○ > \*[○○]○○○

中下降が通常の大きな下降に変化してその後ろにあった下降は消え、1拍目の後にあった下降が1拍後退する、というだけの簡単な変化で成立する。すなわち、「西南部九州二型アクセントA型の祖形は高く始まり2拍目の後で下降していた」とする案である。

木部氏は、音調の山が1拍目にある型と1~2拍目にある型を検討し、山の後退が起きやすいことから1拍目のみ高い方を古形と見る（p.354）。しかし、「式」を受け継い

だというだけで通説の名義抄のたとえば \*〔○○〕○から \*〔○〕○○への変化を説明するのは困難である。HHM-の下降式を想定し、それが HHL-に転じたとする方がはるかに簡単である。屋久島諸方言の祖形も \*HHL-で、これが氏の X 式に立つものと考ええる。その意味で、同島の宮之浦方言の位置づけも氏とは異なってくることになる。

拙論 (1988) は高起群だけを問題にしたもので B 型の祖形については何も述べていないが、当然、全体の祖体系の低起群に対応するもので、低く始まっていたと見ている。その後の動きは複数の可能性があるが、アクセント単位の末尾が高くなる型を想定するのが一番自然であろう。木部氏の関心も主に A 型の方であったと見られ、B 型については低く始まったとあるだけである。

要するに、本節の内容には概ね同意するものの、真に新しい主張をするためには、上記拙案を批判した論を展開する必要があることになる。

なお、拙論 (1984) の N 型アクセント論に対し、木部氏は次の批判をしている (p. 352)。

上野は N 型アの成立に関しても共通の原理を見いだそうとする節が見られるが、共時態として「式」を持つことと、名義抄式の「式」に繋がることとは別で、隠岐の三型と西南九州の二型が同じ成立過程を辿ったと考える必要はない。[要約]

一般化を強く押し出したためにそう受け取られたかもしれないが、もとより隠岐と西南部九州が同じ成立過程を経たとは一度も考えたことがない。隠岐島諸方言も大分前に全島の調査を済ませ、金田一春彦氏説を修正する案を考えてあるが、未発表のままとなっている。島前の知夫 (ちぶ) の二型アクセントは、隠岐の三型アクセントから変化して出来たもので、九州の二型とはもちろん繋がらない。

#### 4. 第4章「トカラ列島の方言」

本土方言の最南端で奄美方言と接するトカラ7島の方言を対象にして、その音声・音韻 (第1節)、アクセント (第2節)、文法 (第3節) を扱ったものである。

トカラ列島は交通が不便で、調査研究が最も遅れていた地域の一つである。鹿児島市の港を出た船が7島を順番に回り、戻りはその逆コースを取るので、住民が隣の島に渡るのも容易でなく、役場は鹿児島市内にある。全島の調査は短期の滞在では到底不可能で、私の場合は鹿児島市内で出身者を探すしかなく、それでも随分難渋した。木部氏は鹿児島市に住み、しかも十島村誌に執筆を依頼されての調査であったとは言え、その調査の苦労は想像にあまりある。その事情を考えると、本書の中に音声・音韻や文法まで入っていることは大いに意味のあることである。今後の基本的な文献の一つになるに違いない。内容のコメントは割愛するしかない。

## 5. 終わりに

以上、評者の関心の赴くままに書いてきた。仮にその批判に当たっている面があったとしても、本書により西南部九州二型アクセントの研究が大きく前進したことは確実に言える。とりわけゴンザ資料の解釈は、本書をもって真の出発点となるものとする。

### [引用文献]

- 上野善道 (1984) 「N 型アクセントの一般特性について」平山輝男博士古稀記念会編『現代方言学の課題』2 (記述的研究篇), 明治書院: 167-209
- 上野善道 (1988) 「下降式アクセントの意味するもの」『東京大学言語学論集 '88』: 35-73
- 上野善道 (1992) 「鹿児島県吹上町方言の複合名詞のアクセント」『日本語イントネーションの実態と分析』重点領域研究「日本語音声」C3 班平成3年度研究成果報告書: 91-208

### [補記]

『音声研究』5-3 に松森晶子氏による本書の書評がある。また、木部氏の「潜在型」は生成音韻論の基底形と取る方が理解しやすいようである。

(2000年2月28日発行 勉誠出版刊 A5版 16+454 ページ 本体価格 16,800 円)

——東京大学大学院教授——

(2002年9月26日 受理)